



公益財団法人 広島平和文化センター
Hiroshima Peace Culture Foundation

〒730-0811 広島市中区中島町1番2号
TEL (082) 241-5246 (代表) FAX (082) 542-7941 E-mail: p-soumu@pcf.city.hiroshima.jp
平成28年(2016年)11月/年3回発行 [URL]http://www.pcf.city.hiroshima.jp/hpcf/

被爆七十一周年平和記念式典

— 依然として世界には、地球そのものを破壊しかねない一万五千発を超える核兵器が存在します —

被爆七十一年目の八月六日(土)、広島市の平和記念公園で、市主催の平和記念式典(広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式)が行われ、被爆者や遺族など約五万人が参列して犠牲者の冥福と恒久平和を祈りました。式典は午前八時に始まり、最初に松井一實広島市長と遺族代表二人が、この一年間に亡くなられたことが確認された五千五百十一人の氏名が記帳された三冊の原爆死没者名簿を、原爆死没者慰霊碑の中の奉安箱に奉納しました。これで名簿登録者総数は三十万三千百九十五人、名簿総数は百十一冊となりました。



平和宣言を行う松井広島市長

続いて永田雅紀広島市議会議長の式辞、各代表による献花の後、原爆が投下された八時十五分に、遺族代表の亀本宗祐さんと、こども代表の武田結衣さんが平和の鐘をつき、参列者全員が一分間の黙祷を捧げました。この後、松井市長が平和宣言を行いました。宣言の中で市長

は、一九四五年八月六日午前八時十五分、「絶対悪」原子爆弾が広島に投下され、その年の暮れまでに十四万もの尊い命が奪われ、また、辛うじて生き延びた人々も放射線の障害に苦しみ、就職や結婚の差別に遭い、心身に負った深い傷は今なお消えることがないと述べ、被爆者から寄せられた生々しい証言を紹介しました。

そして市長は、あれから七十一周年、依然として世界には、広島に投下された原子爆弾の威力をはるかに上回り、地球そのものを破壊しかねない一万五千発を超える核兵器が存在し、核戦争や核爆発に至りかねない数多くの事件や事故が明らかにあっており、テロリストによる使用も懸念されていると指摘し、私たちはこの現実を前にしたとき、被爆者の心からの呼び掛け、訴えを受け止めて、更なる行動を起こさなければならず、多様な価値観を認め合いながら、「共に生きる」世界を目指し努力を重ねなければならないと力強く訴えました。

目次

被爆71周年平和記念式典 1
長崎原爆犠牲者慰霊の会/米国オンラインニュースへの意見寄稿及び核兵器保有国及び核の傘の下にある国々へのメッセージの発出 2
国連事務総長が広島市の被爆樹木の苗木を植樹 3
被爆体験記「私の被爆体験-原爆を語り伝えるために」(佐渡郁子) 4
こども平和キャンプ/国内ジャーナリスト研修「ヒロシマ講座」 5
青少年「平和と交流」支援事業/ピースライター2016 6
英語で伝えようヒロシマセミナー/ヒロシマピースフォーラム/被爆体験の継承にご協力を 7
「広島・長崎講座」開設大学への支援/平和首長会議リーダー都市就任要請等 8
国内5都市で原爆展を開催 9

国際平和シンポジウム(長崎)/広島平和学習セミナー(横浜市、大津市)/「国際平和デー」記念行事 10
高校生による「原爆の絵」が完成 11
被爆体験記集Ⅱ・Ⅲ発行/資料展「井出三千男の残した被爆建物」/「音楽に残る広島とヒロシマ」(「ヒロシマと音楽」委員会 能登原由美氏インタビュー) 12~13
国際交流員による英語の絵本の読み聞かせ会/国際交流ラウンジをご利用下さい/新国際交流員の紹介/広島市外国人市民の生活相談コーナーをご利用下さい/「姉妹・友好都市の日」記念イベント(モントリオール、ボルゴグラード) 14
JICAサロン「余熱の会」(マイクロネシア) 15
海外からの来訪者が発信するメッセージ/平和記念資料館東館オープン予定変更/書籍の紹介「なぜ核はなくならないのかⅡ」(広島平和研究所) 16

を、米国をはじめ世界の人人々に示すものであり、あの『絶対悪』を許さないというヒロシマの思いがオバマ大統領に届いたことの証しだと述べました。

そして、今こそ私たちは核兵器廃絶への道筋をつけるためにヒロシマの思いを基に「情熱」を持って「連帯」して行動を起こすべきであり、四月にG7の外相が初めて広島に集い、核兵器を持つ国、持たない国という立場を超えて世界の為政者に広島・長崎訪問を呼び掛け、包括的核実験禁止条約の早期発効や核不拡散条約に基づく核軍縮交渉義務を果たすことを求める宣言を公表したことは、正に「連帯」に向けた一歩だと述べました。

平和宣言の後、ごども代表の青木優太君と中奥垂穂さんが、被爆者から直接、体験談を聞きたくても聞くことが出来なくなる日が近づいている今日、世界各地から多くの人が広島を訪れて原子爆弾の恐ろしさを実感し、「あの日の出来事を伝える」と約束してくれたことに平和の広がりを感じたと語り、「私たちには、被爆者から託された声を伝える責任があります。一人

一人が、自分の言葉で、丁寧に、戦争を知らない人へ 次の世代へ 世界の人々へ 命の尊さを平和への願いを 私たちが語り伝えていきます。」と、「平和への誓い」を読み上げました。

この後「あいさつ」の中で、安倍晋三内閣総理大臣は、七十一年前に広島及び長崎で起こった悲惨な経緯を二度と繰り返させないための努力を絶え間なく積み重ねていくことは、今を生きる私たちの責任であるとし、「唯一の戦争被爆国として、非核三原則を堅持しつつ、核兵器不拡散条約（NPT）体制の維持及び強化の重要性を訴えてまいります。核兵器国と非核兵器国の双方に協力を求め、また、世界の指導者や若者に被爆の悲惨な実態に触れてもらうことにより、『核兵器のない世界』に向け、努力を積み重ねてまいります。」と述べました。また、被爆者の平均年齢が八十歳を越えた現在、実情をしっかりと踏まえながら、援護施策を着実に推進していく考えを示しました。

式典には三十七都道府県の遺族代表の他、核兵器国のアメリカ、イギリス、フランス、ロシアを含む九十一か国と欧州連合

（EU）の大使や代表が参列しました。

式典の様子はインターネットでライブ中継されました。動画は、ひろしまムービーチャンネル（<http://www.city.hiroshima.lg.jp/movie/>）の「原爆・平和」から視聴できます。式典で読み上げられた「平和宣言」、「平和への誓い」の全文は、広島市ホームページ（<http://www.city.hiroshima.lg.jp/>）の「原爆・平和」↓「平和宣言・平和への誓い」平和に関する要請等」から閲覧できます。「平和宣言」は九言語（アラビア語、中国語、英語、フランス語、ドイツ語、ハンガール、ポルトガル語、ロシア語、スペイン語）の外国語版も閲覧できます。

（総務課）

長崎原爆犠牲者慰霊の会

本財団では、長崎に原爆が投下された八月九日に、同じ被爆地である広島から長崎の原爆犠牲者に哀悼の意を表し、平和への誓いを新たにするため、「長



挨拶する小溝理事長

崎原爆犠牲者慰霊の会」を開催しています。

平和記念資料館東館地下一階ホワイエで開催した今年の慰霊の会には、被爆者や国内外からの来館者など約五十人が参加しました。

まず、小溝泰義本財団理事長の挨拶で開会し、長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典のテレビ中継を視聴しました。原爆投下時刻の午前十一時二分には、全員で一分間の黙とうを捧げました。

続いて、広島県原爆被害者団体協議会の佐久間邦彦理事長からご挨拶をいただき、最後に、長崎の被爆者証言ビデオ（証言者・木村徳子さん）を視聴して閉会しました。

（平和連帯推進課）

核兵器廃絶に向けた米欧オンラインニュースへの意見寄稿と核兵器保有国及び核の傘の下にある国々へのメッセージの発出

今年八月下旬にジュネーブの国連欧州本部で開催された「多国間核軍縮交渉の前進に関する国連公開作業部会」において、「核兵器の法的禁止の交渉を二〇一七年中に開始するよう国連総会に勧告する」との報告書が賛成多数で採択されました。

これを受け、平和首長会議では、国連総会での議論を後押しするとともに核兵器廃絶に向けた機運を醸成するため、国連が制定した「核兵器の全面的廃絶のための国際デー」（九月二十六日）に合わせ、米国のオンラインニュース「The Nation」に意見を寄稿しました。

また、十月三日から開催された国連総会第一委員会に合わせ、核兵器国及び核の傘の下にある国々に対し、リーダーシップの発揮と、核兵器のない世界に大きく歩を進めることを要請するメッセージを発出しました。

それぞれの概要は次のとおり

です。

「The Nation」への意見寄稿

世界の為政者が、核兵器に依存しない安全保障を目指すことを一般市民が切に願っていることを十分理解し、決意を持ってそのための取組を強化することは急務となっている。その過程で為政者達は、世界の広範な市民が同盟意識のもとでの結束を重視していることを、理解していくこととなる。

世界の為政者は、今こそ発想を転換し、核兵器の禁止に向けて果敢なリーダーシップを発揮すべきである。為政者の核兵器廃

絶に向けた明確な決意は、必ず核軍縮・不拡散に向けた取組を加速させる。被爆者の核廃絶に

対する切実な思いを理解した為政者が、違いを越えて協力し、核兵器廃絶の障害を乗り越えたとき、核兵器禁止条約の締結に向けた取組が進むと信じている。

平和首長会議は、幅広い市民社会のパートナーと共に、世界の為政者のイニシアティブを全面的に支援するとともに、国際社会の相互理解と協力の促進のために、市民社会の幅広い潮流を強化していく。今こそ、国、地方自治体と市民社会の多様な構成員が一体となり、核兵器廃

絶に向けて核兵器の法的禁止を進めるべきである。

核兵器保有国及び核の傘の下にある国々へのメッセージ

過去の核軍縮は、国際緊張の高まる中、為政者相互の歩み寄りの努力によって実現した。キューバ危機から間もない一九六三年、ケネディとフルシチョフは部分的核実験禁止条約に合意し、一九八六年にはレーガンとゴルバチョフが核軍縮と中距離核戦力全廃について話し合い、翌年の二国間条約締結につながった。

今日の国際社会も緊急的な状

況に直面しており、勇気と英知を結集して互いに歩み寄り、リーダーシップを促して問題解決に当たるべきである。新たな課題に対応するためには新しい考え方と斬新なアプローチが必要であり、国際社会が総力をあげて協議し、現実の課題にいかに対応していくかを議論しなければならぬ。核兵器国及び核の傘の下にある国々、そしてNPT（核兵器不拡散条約）非加盟国は真剣に議論を重ね、核兵器に依存しない安全保障を検討することが急務であり、今こそ世界の為政者は果敢なリーダーシップを発揮すべきである。

市民社会は、同胞意識を育むことで、政治的リーダーシップの実行にふさわしい環境を整備するという側面において、重要な役割と責任を負っており、世界の為政者の力になれると考えている。平和首長会議も引き続き核兵器廃絶の進展に取り組み、その環境作りのためのイニシアティブを後押しする。核廃絶を「目指す」だけでなく、実際に進展させることは、政治情勢全般の改善に寄与し、他の国際問題の平和的な解決や平和の実現をも促進すると確信している。

（平和連帯推進課）

国連事務総長が広島を被爆樹木の苗木を植樹しました

広島平和文化センターが事務局を務める平和首長会議では、被爆に耐えて現在も生き続けるヒロシマ・ナガサキの被爆樹木の種や苗木を、希望する加盟都市に配付し、平和の象徴として大切に育ててもらうことにより市民の平和意識の醸成を図る取組を推進し

ています。

十月三日、広島で被爆したイチョウの種から育てられた「被爆二世」の苗木が、潘基文国連事務総長により、スイス・ジュネーブ市の国連欧州本部の公園内に植樹されました。

この苗木は、加盟都市のスイス・ルツェルン市が育成したもので、今年五月、「多国間核軍縮交渉の前進に関する公開作業部会」出席のためにジュネーブを訪れた松井一實広島市長・平和首長会議会長

から、平和首長会議の取組の一環として国連欧州本部に贈呈されました。

植樹式には、潘基文国連事務総長、マイケル・モラー国連欧州本部長、ニキル・セス国連訓練調査研究所事務局長、在ジュネーブ国際機関日本政府代表部の伊原純一大使等が出席しました。平和首長会議からは、副会長都市であるベルギー・イーペル市のジャン・ドゥルネッツ市長が出席し、この植樹を機に、平和への思いが広く長く共有されること

を願うとの会長メッセージを代読しました。

植樹式において国連事務総長は、自らの悲惨な経験を乗り越え、希望のメッセージを発信し続ける被爆者に対する敬意を表するとともに、全ての国々が核廃絶を緊急課題とすべきであり、この木が「核のない世界」のための国際社会の団結のシンボルとなるよう祈念すると述べました。

（平和連帯推進課）



潘基文国連事務総長による植樹
（写真提供：UN photos/PM Viro）



プロフィール

〔さだ いくこ〕

1937年(昭和12年)生まれ。

国民学校2年生だった7歳のとき、爆心地から870m離れた上流川町(現在の三越百貨店付近)の祖母の家の庭で、妹と砂遊びをしていたときに被爆。

被爆体験記

peace

私の被爆体験

—原爆を語り伝えるために—

本財団被爆体験証言者

佐渡 郁子

祖母の家で被爆

私の家族は、両親と私(七歳)と妹(一歳)の四大家族で、松川町に住んでいました。

一九四五年(昭和二十年)八月六日、父は国鉄に勤務しており、母は建物疎開(焼夷弾の攻撃による火災の類焼を防止するための防火帯設置作業)の地域義勇隊に動員されて早朝から働いていました。

母が出かけるため、私と妹は上流川町の祖母(父の母)の家に預けられ、午前八時一五分頃には真夏の太陽がきらきら照りつける庭で遊んでいました。この祖母の家は、爆心地から八七〇メートルの至近距離でした。

「ピカッ」「ドーン」の瞬間に気を失い、気が付いた時には私も妹もずいぶん離れたところに吹き飛ばされていました。私は手と顔を火傷していました。妹は、日差しがあまりに熱いのでシュミーズだけのうす着にしていたため、全身大火傷してしまい、ただれた手や足の皮膚が垂れ下がっていました。

その爆風で一瞬にして家は吹き飛ばされ、三千度とも五千度

ともいわれる熱線で木造家屋は燃えだし、見渡す限り爆風によるほこりや、燃え上がる煤煙や、燃え盛る焰です。不気味などす黒い焰に燃え盛る景色は、地獄絵としか言いようのない不気味な景色となりました。

東練兵場へ

燃えさかる炎や煙の中に居場所に避難することになりました。妹を背負い祖母と三人で東練兵場に行くため猿猴橋を目指して進みましたが、道には瓦礫が散乱し、煤煙や火の粉を払いながら進まなければなりません。道はたには大火傷で苦しむ人。「水をくれー水をくれー」と叫ぶ人。川に入って助けを求め人。川に入って死んでしまっている人。ほんとうに地獄の道を自分達もさまよっているようでした。

熱風で気道が焼けたためのか、いたる所で水を求めて喘ぐ人がおり、中には防火水槽に頭を突っ込んでそのまま亡くなってしまった人などが数多く見られ、無残な姿が今も眼下に浮かぶことがあります。

何時間かかったのでしょうか、やっとの思いで東練兵場にたどり着きました。妹の火傷はひどく、肩、首、胸、手、足などが赤く焼けただけ、着ていたシュミーズが血で真っ赤に染まっています。軍医さんに手当てをお願いしても、なかなか順番が回って来ず、イライラしたことが忘れられません。

東練兵場には黒焦げになった死体がたくさん転がっており、また、怪我や火傷などの痛みに苦しんで「痛いよ、痛いよ」と泣き叫ぶ人や、家族の人が亡くなって悲しみを抑えきれず泣く声などで騒然としており、まさに地獄に引き込まれているような雰囲気でした。

母と再会

地域義勇隊の作業に行っていた母が午後、東練兵場を訪ねて来て、元気で再会することが出来ました。母は爆心地から一キロメートル足らずの距離で作業していたにもかかわらず、幸運にも大きい建物の陰にいたことで、他の人達が多数亡くなったのに怪我もしないで元気で再会することが出来ました。

母は妹が大やけどをしている姿をみて、朝別れる時あんなに元気だったのにと悲しみ、寝ている妹をやさしく摩ってやることしかできませんでした。

その後、母は今朝慌しく出た家が火事になっていないか心配だと、祖母や私に妹のことを頼んで様子を見に出て行きました。東練兵場から自宅までの距離は二キロメートルほどですが、交通機関もなく、途中至る所で火災が発生してごった返しており、やっと三時間かけてたどり着いたそうです。その時ちょうど、隣家が焼け、自宅も焼けかけているところで、近寄ることも出来ない状況でしたが、母は意を決し、防空頭巾に水をかぶって家に入り、入口に置いていた救急袋だけを何とか取り出すことが出来ました。

広島市全体が大火に包まれている状況で、消火体制が機能するすべもなく、見る見るうちに猛火に包まれた自宅を、母は涙しながら見送ったとのことでした。

一歳の妹との別れ

被爆翌日、目を覚ますと妹が泣いていました。よく見ると火

傷した部分に沢山蛆虫がわき、その部分が痛いのか痒いのか、足をばたつかせていました。軍医さんに割り箸をもらい、きれいに蛆虫を取ってあげると、妹は気持ちよくなったのか眠りにつきました。

被爆二日後の八日の夕方頃になると、妹の体がだんだん冷たくなり、そのまま亡くなってしまいました。とてもきれいな顔でした。

翌日夕方五時ごろ、兵隊さんに荷車を借りて妹の遺体と薪を積み、近くの公園に行って私と母の二人で火葬してあげました。公園は臨時の火葬場になっていて、次々と運ばれて来る遺体に、兵隊さんが油をかけて焼き続けていました。熱い時期でもあり、死体の腐敗も早く、臭いがひどいので窒息し倒れそうでした。私達は兵隊さんに教わったとおり、小さな缶に遺骨を入れて練兵場に持ちかえりました。

家のある人は自宅に帰ってゆきますが、私達には帰る家がありませんので、それから練兵場のテントを借りて野宿をするようになりました。

原爆を語り伝えるために

私は原子爆弾を身を以て体験した者として、核兵器の廃絶と世界平和を訴えていきます。原爆の悲劇の記憶を日本人が忘れてしまわないよう、特に若い世代の方々への証言として残しておきたいと思います。

子ども平和キャンプ 仲間と平和を考える

本財団では六月四日から一泊二日の日程で小・中学生向けの平和キャンプを開催しました。今年で通算二十三回目となります。

このキャンプは広島市三滝少年自然の家と広島市似島臨海少年自然の家との共催で、対象は小学四年生から中学三年生です。今年は小学生二十三人、中学生五人、十八歳以上のボランティア七人の計三十五人が参加しました。

一日目、被爆後の復旧の様子を紹介したアニメを鑑賞した後、被爆の実相についての講座を受けて、ヒロシマピースボラン

ティアの案内で原爆ドームを見学しました。その後、原爆ドーム前から宇品の広島港まで被爆電車に乗り、車内で沿線の被爆建物などについての説明を受けた後、似島へ移動しました。似島では、かつて戦争と原爆に翻弄された似島の過去を詳しく学びました。夜には、ピースファイヤーを行い、楽しいゲームをしながら、平和を考える時間を過ごしました。

二日目は、皆で協力してバウムクーヘンを作り、おいしく食べた後、慰霊碑を参拝しました。そして、班ごとに学習のまとめを行い、発表しました。「戦争でたくさんの人が亡くなったことがわかった」、「戦争がない平和



バウムクーヘンづくりの様子

な町にしたい」といった意見があり、次世代を担う小・中学生にとって、平和について考える有意義な機会となりました。

(平和記念資料館 啓発課)

国内ジャーナリスト研修 ヒロシマ講座

広島市では、核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現に向けた世論の醸成を図るため、今年も国内ジャーナリスト研修「ヒロシマ講座」を実施しました。

平成十四年度から開始した当講座は、国内の新聞社の若手ジャーナリストを対象に、被爆の実相や被爆地広島島の役割、核兵器を巡る世界情勢等について総合的・体系的に学び、その成果を報道や論説活動等を通じて広く国内外に発信していただくことを目的としています。

十五回目の今年の講座は、地方紙の記者八人が参加し、七月二十八日(木)から八月七日(日)までの十一日間、被爆者の証言の聴講や原爆被害に関する講義などを受けるとともに、核兵器廃絶に向けて取組を行う若者や



研修を受講する参加者

平和記念式典の取材などを行いました。

参加者からは、「新聞社の役割を改めて考えさせられた」、「次世代への継承をテーマに熱意を持って積極的に活動に取り組み若者の話を聞くことができた」等の感想が寄せられました。参加者は、この研修を通じて学んだ被爆者の体験や平和への思いを、八月六日の広島の様子とともに各紙に掲載し、ヒロシマの心を広く伝えました。

【お問い合わせ先】

広島市市民局国際平和推進部
和推進課まで

☎(082)242-7831

青少年「平和と交流」支援事業

青少年「平和と交流」支援事業

対象事業 (広島市等の所管)	広島市等が実施する事業の概要	平和首長会議独自プログラムを含めた全体日程	平和首長会議独自プログラムを含めた実施場所	支援人数 (実績)	参加者の派遣元加盟自治体
HIROSHIMA and PEACE (広島市立大学国際学部)	国内外の学生等が「ヒロシマと平和」を英語で学ぶ夏期集中講座	8/2~8/10 (9日間)	広島市立大学、平和記念資料館等	8人 (学生・社会人)	サントス市(ブラジル)、シアトル市(米国)、マンチェスター市(英国)、マラコブ市(フランス)、モントリオール市(カナダ)、秋田市
ひろしま子ども平和の集い (・(公財)広島平和文化センター ・広島市(市民局、教育委員会))	子どもたちによる平和メッセージの発信	8/6~8/7 (2日間)	国際会議場、平和記念資料館等	7人 (中学生・引率者)	いわき市
ヒロシマ平和セミナー (広島市立大学広島平和研究所)	公務員や大学院生等を対象にした平和・核兵器廃絶に係る集中講義	8/26~8/28 (3日間)	広島市立大学サテライトキャンパス、平和記念資料館等	10人 (公務員)	郡山市、八千代市、三鷹市、国立市、瑞穂町、高山市、豊明市、吹田市、長崎市、沖縄市

被爆の実相を守り、広め、伝える事業の一環として、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現

この事業は、平和首長会議国内外加盟都市の青少年に対して、「ヒロシマと交流」支援事業を実施した。

この事業は、平和首長会議国内外加盟都市の青少年に対して、「ヒロシマと交流」支援事業を実施した。この事業は、平和首長会議国内外加盟都市の青少年に対して、「ヒロシマと交流」支援事業を実施した。この事業は、平和首長会議国内外加盟都市の青少年に対して、「ヒロシマと交流」支援事業を実施した。



参加者による意見交換(HIROSHIMA and PEACE)

(平和連帯推進課)

「ピースナイター 二〇一六」の開催

八月六日(土)、生協ひろしま等との共催により、カープ応援の場を活用して核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けたメッセージを発信する「ピースナイター二〇一六」をマツダスタジアムで開催しました。

「ひろしま子ども平和の集い」そして八月二十六日から二十八日に広島市立大学サテライトキャンパスで実施された「ヒロシマ平和セミナー『平和創造の手法と平和の課題』」の三事業を対象に支援を行いました。また、各プログラムにあわせて、平和首長会議の概要説明や意見交換会等の平和首長会議の独自プログラムを実施しました。

① 大型ビジョンで松井市長や湯崎県知事等の平和を願うメッセージを放映しました。
② 今年の開催テーマ「継承」にあわせ、被爆体験伝承者第一期生として活動する保田麻友さんが始球式を行いました



緑色と赤色のピースポスターを用いて原爆ドームと同じ高さ「ピースライン25」を作る観客

③ カープの監督、選手等がユニフォームにピースワッペンを着けてプレーしました。
④ 五回裏終了時に、球場全体が緑色に染まる中、原爆ドームと同じ高さの地上25メートルに赤色の線「ピースライン25」を作り、平和への願いをアピールしました。また、グラウンドでは、地元高校生等による「ピースパフォーマンス」を行いました。
今年で九回目の開催となり、五回裏のピースポスターを用いたアピール活動に約三万人の観客が参加し、多くの方が核兵器廃絶及び世界恒久平和について考える日となりました。
(平和連帯推進課)

英語で伝えよう ヒロシマセミナー の実施

平和記念資料館では、一般及び高校生を対象に、原爆被害の実相を英語で伝える「英語で伝えようヒロシマセミナー」を平成十八年度から実施していま

す。今年度は、「一般の部」を五月二十二日(日)と七月十七日(日)に、「高校生の部」を六月十八日(土)と七月十六日(土)にそれぞれ実施しました。

「一般の部」では、両回とも

前半部分は米国出身のクレイグ・ネヴィットさんが、外国人からの質問を想定しつつ原爆被害の概要について英語で説明を行いました。

第一回の後半部分では、米国出身のアシュリー・サウザーさんが自身の体験をもとに講演を行い、「No More Hiroshimas」という広島への思いなどについて共に考えました。

また、第二回の後半部分では、前半に引き続きクレイグ・ネヴィットさんがグループワークを行い、広島のことを知ってもらうにはどうしたらよいか参加者と一緒に考えました。

「高校生の部」では、両回とも、原爆被害の概要について資料館職員が英語で説明を行うとともに、広島のことを伝えるためのグループワークを行いました。

「一般の部」には計百五十人、「高校生の部」には計百二人が参加し、参加者からは「勉強になった」、「広島のことについてもっと知りたいと思った」、などの声寄せられました。

参加者とともにグループワークを行うネヴィット氏

(平和記念資料館 啓発課)

ヒロシマ・ピース フォーラム

本財団では、広島市と共催で、市民が「平和の原点」としての「ヒロシマ」を見つめ直し、原爆や平和について考え、どのように行動していけばよいかを探求する機会を提供するため、「ヒロシマ・ピースフォーラム」を開催しています。昨年度に続き、広島市立大学の講座「広島からの平和学」と連携して、五月から七月までの間に全六回開催し、同大学の学生を含む十代から七十代以上までの約八十人が受講しました。

フォーラムでは、被爆体験証言の聴講や、医療、国際協力、市民社会など多角的な面から原爆や平和について考える講座を用意するとともに、グループ

討議と最終回での発表により、受講者自身で考え、活発な意見交換ができる内容としました。また、第三回目には現地学習として広島城周辺の陸軍に関する史跡を巡りました。

受講者のアンケートでは、「様々な意見を交換でき、フォーラムで学んだことをより深く理解することができた」、「原爆被害や平和に関して理解を深めることができた」等の感想が寄せられました。

(平和連帯推進課)



広島城周辺の陸軍に関する史跡巡りの様子

被爆資料、原爆死没者の氏名・遺影、被爆体験記募集
被爆体験の継承にご協力を

広島平和記念資料館と国立広島原爆死没者追悼平和祈念館は、被爆体験を継承するための貴重な資料の収集を行っています。皆様のご協力をお願いします。

- 被爆資料―被爆された時に身につけられていた衣服など、被爆の事実を直接物語る実物資料。
- 氏名・遺影―原爆死没者の氏名・遺影(氏名のみ)の登録も可能。
- 被爆体験記―被爆者の体験記や、遺族・友人の追悼記など。

【お問い合わせ】

- 被爆資料について
広島平和記念資料館 学芸課
☎(082) 241・4004
- 氏名・遺影、体験記について
国立広島原爆死没者追悼平和祈念館
☎(082) 543・6271

「広島・長崎講座」 開設大学への支援

広島市と長崎市は、被爆者のメッセージを人類共通の財産として学問的に整理・体系化し、普遍性のある学問として若い世代に伝えるため、国内外の大学での「広島・長崎講座」の開設・普及に取り組んでいます。

平成二十八年五月から六月の間に米国の三大学が実施した広島での平和学習に際し、本財団はプログラムの実施支援等を行いました。

セントラルコネティカット州立大学

五月三十一日（火）から六月二日（木）まで、学生十二人と教員二人が広島での平和学習を行いました。十回目となる今回は、平和記念公園や平和記念資料館、原爆死没者追悼平和祈念館の見学、被爆体験証言の聴講などを通し、被爆の実相を学びました。

また、引率の友田教授のお母様の遺影が同祈念館に登録されており、一行はその見学を通じて、被爆とその記憶の継承についてより身近に感じた様子でした。



被爆体験証言を聴講するアラバマ大学一行

その他、同校主催のディスカッションに広島市立大学及び広島経済大学の学生が参加し、有意義な交流の機会となりました。

アラバマ大学

六月六日（月）から六月十四日（火）まで、学生八人と教員一人が広島での平和学習を行いました。

今回が初めての広島での学習でしたが、滞在期間が長く、平和記念公園や平和記念資料館、原爆死没者追悼平和祈念館の見学、被爆体験証言の聴講に加え、放射線影響研究所や国連訓練調査研究所（UNITAR）広島事務所、広島平和研究所など様々な訪問先で被爆の実相や平和について多様な視点で学ぶことができました。

とができ、有意義なプログラムとなりました。

インディアナ大学パデュー大学 インディアナポリス校

六月十二日（日）から六月十三日（月）まで、学生九人と教員二人が広島での平和学習を初めて実施しました。

参加者は、日本の医療現場におけるコミュニケーション及び異文化間コミュニケーションのクラスの受講者であったことから、放射線影響研究所での講義や、原爆養護ホーム舟入むつみ園の訪問を実施しました。舟入むつみ園では、入居者の方から家族にも語ったことがないという貴重な被爆体験を聞くことができ、参加した学生の心に深く刻まれた様子でした。

（平和連帯推進課）

平和首長会議リー ダー都市就任要 請等（米国出張）

小溝泰義平和首長会議事務総長（本財団理事長）が今年八月、米国内の四都市（デモイン市、シカゴ市、インディアナポリス市及びワシントンDC）を訪問し、各地域で中心的な役割を担

うリーダー都市への就任要請を行いました。また、全米市長会議への出席や、政府関係者及び平和NGO関係者との今後の連携についての協議などを行いました。

主な用務は次のとおりです。

六月二十二日（水）

フランクリン・カウニーデモイン市長と面会しました。オバマ大統領の来広を受け、核兵器廃絶の機運が高まっている中で、「今こそ、米国の中でリーダー都市を中心に主体的な活動を展開する土台を築くため、是非リーダー都市として協力をお願いしたい」との意向を伝えました。また、原爆の子の像に寄せられた折鶴を手渡し、込められた平和を願う思いを伝えました。

カウニー市長はその場でリー

ダー都市就任の承諾書に署名し、今後の地域活動について速やかに検討したいと述べられました。

六月二十三日（木）

岩藤俊幸在シカゴ日本国総領事館総領事と面会し、平和首長会議の米国内での地域活動を推進するため、リーダー都市にデモイン市が就任したこと、米国の

の平和首長会議加盟都市が主体的な活動ができる体制を作っていくことを目指していることを説明しました。岩藤総領事からは、できるだけ協力したいとの回答がありました。

六月二十四日（金）

インディアナポリス市で開催された全米市長会議に出席しました。

会場でビル・デフランシオニューヨーク市長、トム・コ克蘭全米市長会議事務局長及びステファニー・ローリングスブレイク同会長（ポルティモア市長）とそれぞれ面会し、平和首長会議を代表して参加していることを伝え、他、気候変動に対する優良施策の表彰式や開会行事等に参加しました。

六月二十五日（土）

全米市長会議の国際関係常任委員会において、小溝事務総長が発言し、超党派の平和首長会議が核兵器のない平和な世界を共通目標としつつ、各国・地域の独自性を尊重した活動を展開していることを紹介しました。また、全米市長会議が長年にわたり平和首長会議を支持する決議文を採択していることに謝辞を述べるとともに、今後の連携

強化を訴えました。

六月二十七日(月)

バリー・ブレックマンステイムソンセンター共同設立者及びブライアン・フィンレイ同センター会長兼CEO等と面会しました。ブレックマン氏は、市民社会の盛り上がりによって政治家の核兵器の問題についての取り組み方が変わってくるので、平和首長会議の活動は意義のあることだと述べました。また、平和記念資料館に送付予定の原爆投下直前、直後の広島や長崎の写真の原本を紹介されました。

六月二十八日(火)

ローズ・ゴッテモラー米国国務省国務次官と面会しました。この中で、オバマ大統領の来広を受け、核兵器廃絶の機運が高まっている今だからこそ、米国でも平和首長会議の枠組みを活用した取組を強化するために訪米したことや、全米市長会議で平和首長会議を支持する決議文が採択されたことを伝えました。

今回の出張では、三つの大きな成果がありました。一つ目は、デモイン市長に

リーダー都市就任を承諾していただいたこと

です。今後リーダー都市として米国の加盟都市が主体的な活動を展開しつつ、米

国政府の中枢にも働きかけていける体制を作っていくことを期待し、支援していきたくと考えています。二つ目は、平和首長会議として全米市長会議に参加したこと

です。今後も同会議の状況を踏まえながら参加し、連携強化を図ります。

三つ目は、五月にオバマ大統領が来広した際、大統領自ら平和への思いを込めて折った鶴を受け取った小学生と中学生が在籍する広島市内の小学校及び中学校の児童生徒が、そのお返しに、「日米両国が協力して核兵器のない世界を目指していきましょう」との願いを込めて折った千羽の鶴を米国に持参し、全米市長会議会長に贈呈したこと



デモイン市長に折鶴を渡す小溝事務総長

なほ、今回は米国在住の本財団専門委員二人が出張の準備段階から関わり、共に各地を訪問しました。各専門委員の日頃の活動の成果もあり、非常にスムーズに各地での用務が進み、大変有意義な出張となりました。

(平和連帯推進課)

国内五都市で原爆展を開催しました

平和記念資料館では、原爆被害の実相を伝え、核兵器廃絶に向けた国内世論を醸成するため、平成八年度から国内各地の都市で原爆展を開催しています。

今年度は和歌山県広川町、千

葉県船橋市、山梨県甲州市、北海道北広島市・北見市の五都市で開催し、五都市合わせて六千六百人以上の来場者がありました。

各展示会場では、被爆資料のほか、被爆の実相や核兵器の現状を伝える写真パネル、市民が描いた原爆の絵の展示等を行いました。また、広川町では池田精子さんが、甲州市では梶本淑子さんが、北広島市では笠岡貞江さんが、北見市では朴南珠さんが、それぞれ被爆体験講話を行いました。聴講された方は、被爆体験証言者の一言一言に耳を傾けていました。

来場者からは「あの一つの爆弾で、何万人の人が命を落とし、今でも苦しんでいる人がいるかと思うと心が痛みました」、「広島や長崎の資料館へ足を運ぶたい」、「二度と戦争はしてはいけない」などの感想が寄せられました。

実施の概要

【広川町】
期間：七月二十日(水)～七月二十八日(木) (九日間)

【船橋市】
期間：八月三日(水)～八月八

日(月)(六日間)
場所：船橋市民ギャラリー
来場者数：千百十九人

【甲州市】
期間：八月十二日(金)～八月十八日(木)(六日間)(十五日(月)は休館)

【北広島市】
期間：八月二十四日(水)～八月二十八日(日)(五日間)

【北見市】
期間：九月二日(金)～九月七日(水)(六日間)(五日(月)は休館)

【北広島市】
期間：八月二十四日(水)～八月二十八日(日)(五日間)

【北見市】
期間：九月二日(金)～九月七日(水)(六日間)(五日(月)は休館)



被爆体験講話の様子(広川町)

国際平和シンポジウムの開催(長崎)

七月三十日(土)、長崎市と公益財団法人長崎平和推進協会、朝日新聞社の主催、広島市と本財団等の後援により、「核兵器廃絶への道」オバマ時代から未来へ」をテーマに、二十二回目となる国際平和シンポジウムが長崎市の長崎ブリックホール国際会議場で開催されました。

シンポジウムに先立ち、五月に來広したオバマ大統領の演説を聞いたナガサキ・ユースの報告や、被爆三世で俳優・映画監督の杉野希妃さんと被爆二世で文化評論家の切通理作さんの対談が行われました。

シンポジウムでは、ロバート・ガルーチ元米国国務次官補(政治・軍事担当)が基調講演を行い、プルトニウム保有量の増加や核テロへの懸念を訴えました。

続くパネル討論では、核兵器廃絶に向けた取組について議論が交わされ、非核保有国が核軍縮を主導すべきであること、非政府の機関による外交関係の構

築や、人道的アプローチとして被爆体験証言が重要であるなどの意見が出されました。
(平和連帯推進課)

広島平和学習セミナー(横浜及び大津)を開催しました

日時—平成28年7月26日、27日
場所—A P 横浜駅西口(横浜会場)
ピアザ淡海(大津会場)
参加者—学校関係者、教育委員会、旅行会社

広島での平和学習プログラムを全国に紹介することにより、二十一世紀を生きる子どもたちが一人でも多く広島を訪れ、ヒロシマを知り、平和の大切さを学ぶことができるよう、学校関係者や旅行会社などを対象として、広島平和学習セミナーを開催しました。今回、神奈川県横浜市が二十三回目、滋賀県大津市が二十四回目の開催となりました。

セミナーには、神奈川県内から四十二人、滋賀県内からは十三人が出席しました。



プレゼンテーション風景

プレゼンテーション「広島での平和学習とその効果」

原爆によって壊滅的な被害を受け廃墟と化した広島が国際平和文化都市として復興を遂げる様子や、平和記念公園での学習などを紹介しました。また、被爆体験講話、被爆体験記朗読会などのメニューや広島への修学旅行の例を紹介しました。

プレゼンテーション「広島での修学旅行」

広島平和記念資料館の入館者数における地域別の修学旅行の状況を紹介するとともに、両県から広島への修学旅行のモデルコースの提案や、広島でできる体験学習を具体的に紹介しまし



被爆体験記の朗読実演風景

た。

被爆体験記朗読の実演等

体験型平和学習プログラムとして、朗読ボランティアによる被爆体験記や原爆詩の朗読の実演を行いました。

参加者の声

参加者からは、「たくさんの資料と分かりやすい説明、朗読の実践など来年度の修学旅行に向けて大いに参考になった」、「朗読会は心にしみました。ぜひ修学旅行に何となく取り入れた」と感じた」などの意見が多く寄せられました。

(原爆死没者追悼平和祈念館)

「国際平和デー」記念行事の開催

国連では、毎年九月二十一日を「国際平和デー」と定め、世界の停戦と非暴力の日として、この日一日敵対行為をやめるよう呼び掛けています。

この趣旨に賛同し、本財団でも記念行事を開催しました。多くの一般参加者等が見守る中、参加団体の代表者が原爆死没者慰霊碑に献花を行い、正午に参加者全員で一分間の黙とうを捧げるとともに、平和の鐘を鳴らし、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現を祈念しました。また、黙とうにあわせて「二〇二〇年までの核兵器廃絶を！」という平和首長会議の横断幕を慰霊碑前と平和の鐘前に掲げ、その実現を訴えました。

平和首長会議ホームページやフェイスブックを通じた呼び掛けにより、国内外の加盟都市においても様々な記念行事が開催されました。

(平和連帯推進課)

「原爆の絵」が完成

「高校生たちが被爆体験を絵に描く」

本財団は、広島市立基町高等
学校普通科創造表現コースの協
力を得て、平成十九年度から、
本財団被爆体験証言者と生徒が
共同し、証言者の記憶に残る被
爆時の光景を描く「原爆の絵」
の制作に取り組んでいます。

このたび、十二人の証言者と
三十人の生徒、卒業生、教員
が十二グループに分かれて平
成二十七年から制作を進め、
三十五点の絵画が完成しまし
た。

七月四日（月）に、基町高等
学校展示ギャラリーで行われた
完成披露会には、十二人の証言
者と、絵を制作した生徒を始め
とする創造表現コース生徒のほ
か、本財団及び基町高等学校関
係者が出席しました。
亡くなった我が子を背負った



【死んだ我が子を背負う若いお母さん】
製作者：津村栗奈（基町高等学校普通科創造
表現コース3年）、岸田弘子（被爆体験証言者）



【延命地蔵の前で休む真っ黒なおじさん（西国街道にて）】
製作者：川崎友貴（基町高等学校普通科創造
表現コース2年）、近藤康子（被爆体験証言者）



【瓦礫の中から這い出して】
製作者：杉江湧愛（基町高等学校普通科創
造表現コース2年）、原田浩（被爆体験証言者）



【東練兵場からみた巨大な火炎】
製作者：石田菜々子（基町高等学校普通科創
造表現コース2年）、山本定男（被爆体験証言者）



【炎の中で助けを求める女の子】
製作者：岡島愛（基町高等学校普通科創造表
現コース3年）、岡田恵美子（被爆体験証言者）



【閃光】
製作者：小川美波（基町高等学校普通科創造
表現コース3年）、笠岡貞江（被爆体験証言者）



【お寺を襲った炎の竜巻】
製作者：今村遥香（基町高等学校普通科創造
表現コース2年）、國分良徳（被爆体験証言者）



【ひどい火傷を負ったおじさん】
製作者：山野一真（基町高等学校普通科創造
表現コース3年）、山本玲子（被爆体験証言者）



【首筋のうじ虫を取っている母の姿】
制作者：久保友莉乃（基町高等学校普通科創
造表現コース3年）、李鐘根（被爆体験証言者）



【自宅の前で黒い雨に遭う自分】
制作者：市川月穂（基町高等学校普通科創造
表現コース2年）、小倉桂子（被爆体験証言者）



【建物の下敷きになった友達と私】
制作者：高橋舞香（基町高等学校普通科創造
表現コース3年）、梶本淑子（被爆体験証言者）



【逃げたいながら水を求めて～防火用水に群がってみな亡くなっていった】
制作者：岡本実佳枝（基町高等学校普通科創造
表現コース卒業生）、田川康介（被爆体験証言者）

母親を描いた生徒は「七十年
経っても消えない記憶を描きた
かった。子どもの表情を表現す
るのがつらかった」、また、火
球から生じた巨大な火炎を描い

た生徒は「火球は見たことがな
く、イメージが難しかった。平
和記念資料館などで調べた」な
どと、証言者が体験した状況を
絵にする難しさを話してくれま

した。
被爆後の広島の様状を絵画で
残す「原爆の絵」は、被爆体験
をより深く理解してもらおうた
め、証言者による被爆体験講話

や、伝承者による被爆体験伝承
講話で活用するなど、原爆被害
の実相を後世に継承するために
役立てています。
（平和記念資料館 啓発課）

被爆体験記集Ⅱ・Ⅲ 「しまったてはいけない 記憶」を発行しました

国立広島原爆死没者追悼平和
祈念館では、被爆体験記を残す
意欲がありながら、高齢等に
り執筆が困難な広島県内の被爆
者を対象に、国立広島原爆死没
者追悼平和祈念館の職員が聴き
取りと代筆を行い、被爆体験記
の執筆を補助する事業を行って
きました。平成十八年から現在
までに百十六編の被爆体験記が
完成しています。

今年の被爆七十周年を機会に、
これまでのまとめた被爆体験記
を本にして発行しました。ペー
ジ数の関係で五十編に留まりま
したが、広島市内の全中学校・
高等学校、市立図書館、県内の
主要図書館、県内の大学図書館
等に配布しました。

昨年度末に中学校・高等学校
にアンケートを取ったところ、
次のような意見が寄せられまし
た。

「被爆七十周年ということも
あり戦争と平和について深く考
える機会が多く、新着図書コー
ナーに本を置くと手に取って読

んでいる生徒の姿が見られまし
た。」

「平和学習における教員の指
導の一助とさせていたいただきま
した。」

「被爆者が高齢になるにつれ、
直接、体験を伺うことが難しく
なってきました。図書館でも
新聞等の体験談をコピーしてス
クラブしてきましたが、こう
して本にまとめて頂けると資料
として活用するのに大変役立っ
ています。ありがとうございます
です。第二集もよろしく願いま
します。」

ただ、ページ数が五五八、厚

資料展「ああ、ほう じやったねえ。井 手三千男の残し た被爆建物」を開催

平和記念資料館では、被爆
建物を中心になつかしい街の
風景を振り返る資料展を、平
成二十八年九月二十七日から
十一月八日まで当館東館地下
一階で開催しました。

井手三千男氏（広島市安佐
北区出身）は、変貌する都市
広島をフィルムに残した写真
家でした。また、井手氏は原



広島県立広島商業高等学校(被爆時：陸軍兵器学校広
島分教所)平成16年(2004年)9月撮影 ©井手三千男

爆記録写真の研究者でもあり、
写真の専門家の立場から、被
爆建物等を手がかりに写真を
読み解き、平和記念資料館の
資料調査研究会委員として活
躍しました。

井手氏の没後十年にちなん
で開催した今回の資料展で
は、氏の残した膨大なフィル
ムの中から、今は見ることに
できない被爆建物を中心に
写真三十九点(B2版パネル
二十八枚)を展示。街角に立
つ原爆に耐えた広島建造物
をご覧いただきました。

当館所蔵の井手氏の写真パ
ネルも合わせて展示し、来場
者からは、「私の覚えていた
日赤病院はこれです」「この
校舎で学びました。懐かしい
ですね」等の感想が寄せられ
ました。

(平和記念資料館 学芸課)

「被爆体験記集Ⅱ・Ⅲ
「しまったてはいけな
い記憶」



みが三・五センチメートルもあ
るので、手に取るには重すぎる
との意見も複数寄せられました。
その反省を生かし、平成
二十八年度発行分は、二分冊と
し、それぞれ約三百ページ、一
八センチメートルほどの本にし
ました。

今年度発行のⅡ及びⅢでは、
合わせて五十八編を収録してい
ます。表紙には、広島市が取り
組んでいる折り鶴再生モデル事
業において作られた折り鶴再生
紙を使用しました。

各千部発行し、学校と公共施
設に配布しました。主な配布先
は、広島市内全中学校・高等学
校、広島市内全図書館及び広島

“ヒロシマの心”を発信する人々 音楽に残る広島とヒロシマ ～「ヒロシマと音楽」委員会の活動～

委員長 能登原由美さんに聞く

「ヒロシマと音楽」実行委員会の 発足

発足は一九九五年です。当時、
広島大学大学院での私の指導
教授(原田宏司)が委員長を務
めていました。教授から伺った
話では、「ヒロシマ」を題材にし
た音楽作品が非常に多いにも関
わらず、映画や文学作品とは違
い、整理、記録が本格的に行わ
れておらず、資料や記録が散逸
して作品の存在自体が知られず

県内主要図書館、広島県内全大
学図書館です。一般には配布し
ていませんが、本に掲載されて
いる被爆体験記全編を平和情
報ネットワーク(<http://www.global-peace.go.jp/>)で公開して
いますので、ぜひご覧ください。
(原爆死没者追悼平和祈念館)

に消えてしまう危険があったため、RCC中国放送が被爆五〇周年記念事業として始めたそうです。その際、音楽関係者を中心に、マスコミ、広島市、市民団体の関係者が少しずつ加わり、「ヒロシマと音楽」実行委員会という名称で発足しました。ヒロシマに関わりのある内外の曲の情報を収集するとともに、音源を確認、資料を発掘して「ヒロシマに関する音楽」のデータベース化を目指しました。ただ、ゼロからのスタートということではなく、広島大学の教授だった故芝田進午さんが一九八〇年頃から「原爆音楽」の収集と紹介を積極的に行っておられ、その資料も大変参考になったようです。

また、これらの曲の音源を確保するために演奏会を開くとともに、「ヒロシマと音楽」という三分のラジオ番組が製作され、その中でこれらの曲が紹介されています。一九九五年から二〇〇二年まで放送されました。その結果、データベース化された作品は千八百十六曲、コンサートは二十二回行われ、そこで音源化された曲は百十曲となり、実行委員会は二〇〇二年に解散しましたが、引き続き活動が続けようと元委員の有志が集

まり、同年、「ヒロシマと音楽」委員会として再スタートを切りました。

音楽作品データベースを残す

収集した千八百曲余りの作品データベースは二〇〇四年に広島平和文化センターに移管され、現在は平和記念資料館のウェブサイトで「平和データベース」で閲覧できます。また、その一部は資料館地下一階の情報資料室で視聴することができます。

さらに、作品データのリストとともに、こうした活動を振り返る内容の本『ヒロシマと音楽』（汐文社）を二〇〇六年に出版しました。

コンサート「ヒロシマ・音の記憶」

私は二〇〇七年に委員長職を引き継ぎました（ただし二〇一三年〜一四年は渡部朋子（NPO法人ANT-Hiroshima代表）が委員長）。本の出版後はデータベースの補充だけを細々と行っていたのですが、データベースの状態では「音楽ではない」という気持ちが強くなり、実際に音にして広く紹介するの必要を感じたため、二〇一〇年から毎年コンサートを始めました。ただし、予算の問題やコンサートを準備する人員の不足

も懸念されたため、当初から五年間だけの計画としました。企画や資金集めなどの運営の指揮を取ったのは私で、委員のうち演奏家の人には演奏をお願いし、またRCCのOBの委員には、広報や音源の作成関連、司会などをさせていただきました。また、二〇一一年から徐々に若いメンバーが入会し、会計などの仕事を少しずつお願いして引き継ぎを始め、最後の五回目（二〇一四年）は若いメンバーに企画や運営の指揮を取ってもらいました。

こうして、予定していた五回のコンサートを終えたのですが、被爆七十一年目となった今年、改めて「ヒロシマ」を振り返り、これからを考えるきっかけになればと、七月にコンサートを行いました。今回のコンサートでは、被爆者自身による「ヒロシマ」の音楽（川崎優さん、竹西正志さん）や、詩（橋爪文さん）を取り上げることによって、被爆を抱えて七十年余り生きてきた痛みや思い、死者を悼む心に耳を傾ける内容となりました。また、曲の内容や再演の意義が少しでも伝わればと、今回は私自身が曲間に解説を行う「レクチャー・コンサート」の形式としました。

音楽をテーマに様々な活動を

委員会では「広島音楽史」編集プロジェクトも行っています。このプロジェクトは、被爆後のことばかりが語られがちな広島について、戦前（明治以降）のことを振り返ることにより、広島を「今」をもっと根底から見つめ直したいという思いで二〇〇九年に始めました。まずは関係者への聞き取り調査から始めましたが、この中で出会ったのが、「広島学生音楽連盟」のメンバーの方々です。特に、団体発足時の中心人物、原田雅弘さんと千葉佳子さんへのインタビューでは、被爆の翌年から広島市の学生（十七〜十九歳）が集まって音楽団体を結成し、復興チャリティーコンサートを盛んに開催した事実が明らかになりました。

共同でドキュメンタリー映画を製作しました。監督には、ドキュメンタリー映画作家として実績のある広島在住の青原さとしさんを起用しました。この映画は二〇一三年に完成し、その年の夏に広島市の横川シネマで一般公開しました。これを見に来てくださった、「広島学生音楽連盟」メンバーだった方から連絡があり、さらにインタビューを重ねて当時の様子を知らることができました。その後、二〇一五年には「広島学生音楽連盟」に関する解説を付けたDVDを製作（非売品）し、広島市立図書館、広島県立図書館、国会図書館や関係者に寄贈しています。

なお、「広島音楽史」編集プロジェクトについては、その後、戦前、戦中の貴重資料が見つかり始めたため、新たに委員会に加わった若手音楽研究者による学術的なプロジェクトと行うことにしました。その結果としてシンポジウムなどを開催しています。

これは短縮版です。全文はウェブ版機関紙でご覧になれます。（平成二十八年十月取材）

国際交流員による英語の絵本の読み聞かせ会

六月五日、カーリー・カイザー国際交流員による、子どもを対象にした英語の絵本の読み聞かせ会を、国際交流ラウンジにて開催しました。



子どもたちに絵本を読み聞かせるカーリー国際交流員

絵本の読み聞かせは三回行い、最初は英語でゆっくりと読みました。次は日本語を交えながら読み、ストーリーが伝わるように工夫しました。最後は再び英語だけで、読む速度を少し上げて読み、このとき、絵本に繰り返し登場するキーワードを子どもたちと一緒に声に出しながら読みました。初めは少し緊張した様子の子も多かったのですが、次第に声も大きくなり、

国際交流ラウンジをご利用ください

広島国際会議場一階・国際交流ラウンジは、国際交流・協力に関する情報や、外国人市民のための生活に役立つ情報などをスタッフが日本語と英語で提供しています。また、トリオフォンサービス(電話による三者間通話)を利用して、英語以外の言語での対応も行っています。世界の新聞・雑誌の閲覧や、図書の出貸、学習や会合ができて

るスペース、無料インターネットなど、どなたでも自由にご利用いただけます。是非お気軽にご利用ください。

【連絡先】

☎(082)247-9715

E-mail: golounge@pcf.city.hiroshima.jp

【場所】

広島国際会議場一階

【時間】

午前九時～午後六時

(四月～九月は午後七時まで)

【休館日】

十二月二十九日～一月三日

活発に反応が返ってくるようになりました。

読み聞かせの後は、子どもたちと動物のお面を作る作業をしました。また、工作の合間にアメリカの小学校の様子も紹介しました。最後はみんなでお面をかぶり、その動物になりきって、英語で鳴き声を披露しました。

カーリー国際交流員の明るく温かい人柄もあり、会が終わる頃には子どもたちも、お互いすっかり打ち解けて、とてもにぎやかで楽しい会となりました。

今回開催の絵本の読み聞かせ会でしたが、子どもたちに英語や外国の文化に触れてもらう良い機会となりました。

(国際交流・協力課)

新国際交流員のご紹介

今年の八月より、アメリカから来ていたカーリー・カイザー国際交流員に代わり、イギリスからベンジャミン・スワロー国際交流員が国際交流・協力課にいられます。



ベンジャミン・スワロー国際交流員

広島市外国人市民の生活相談コーナーをご利用ください

生活全般について不安を抱える外国人市民からの相談に、多言語で対応できる「外国人市民の生活相談コーナー」を開設しています。

通訳相談員が生活相談、生活関連情報の提供、行政機関窓口等との通訳などを行っています。

【連絡先】

☎(082)241-5010

E-mail: soudan@pcf.city.hiroshima.jp

【場所】

広島国際会議場一階 国際交流ラウンジ内

【時間】

月曜日～金曜日 午前九時～午後四時

【対応言語】

中国語(月～金)、スペイン語(月・水・金)、ポルトガル語(火・木・金) 他

【休室日】

祝日、八月六日、十二月二十九日～一月三日

「姉妹・友好都市の日」記念イベントを市民に紹介

モントリオールの日

七月十日(日)、百貨店の福屋広島駅前店六階マルチの広場で、記念イベントを開催しました。主催は平成二十八年度モントリオールの日実行委員会。

はじめに、メープルウォーターの試飲や社会福祉法人広島市社会福祉事業団 広島市皆賀園オリーブのメープルラスターの試食を行いました。

記念セレモニーでは、主催者等のあいさつ、モントリオール市長

ベンジャミンさん(通称ベンさん)はイギリスのウェールズ地方の出身で、大学時代には愛媛県に一年間留学していた経歴もあり、日本語がとても堪能です。来日後、さっそく派遣の依頼を受け、広島市内の保育園、小・中学校を訪問し、子どもたちと交流しています。とてもフレンドリーな方なので、すぐに子どもたちと打ち解け、楽しく国際交流ができると好評です。

(国際交流・協力課)

から届いたビデオメッセージの紹介、来賓としてケベック州政府在日事務所代表、在日カナダ大使館一等書記官のあいさつがありました。

続いて、ヒロシマ・メッセンジャーのガリエビ・ジャンベルナルさんと川本美帆さんが、モントリオール市にまつわる来場者参加型のクイズを行い、正解者に景品のプレゼントがありました。

また、カナダの大道芸人ジャーミー・イトトンさんによるユーモアあふれる記念パフォーマンズには会場全体が引き込まれ、たくさん笑いと拍手が響きました。

この他、メープルシロップなどの特産品が当たるお楽しみ抽選会、モントリオールとカナダの紹介展示や特産品の展示・販売、シルク・ドゥ・ソレイユ「OTTEM(トテム)」の紹介などを行いました。約四百人の来場者は、食や芸術



記念パフォーマンスの様子

文化を楽しみながらモントリオールやカナダへの理解を深めていました。

ボルゴグラードの日

九月十一日(日)、広島市留学生会館で記念イベントを開催しました。主催―平成二十八年度ボルゴグラードの日実行委員会。

受付を済ませた来場者には、ロシア・ボルゴグラード市の紹介展示コーナーで、ロシアの民芸品やボルゴグラード市の風景写真、記念品などの展示を見ていただきました。また今年には、青少年国際平和未来会議に出席するため八月にボルゴグラードを訪問した広島の高校生・大学生が、交流の様子を自ら説明しました。

次の食文化体験では、定番のポルシチ、黒パンなどのロシア料理と共にグルジアワインなどを、田中香月さんによるピアノの生演奏を聞きながら楽しみました。

ホールでのセレモニーでは、実行委員長、広島市長があいさつし、ボルゴグラード市から送られた市長のメッセージをヒロシマ・メッセンジャーのエカテリナ・シマキナさんが、在大阪ロシア連邦総領事館総領事のメッセージを同じくメッセ



広島合唱団の合唱(上)と、メッセンジャーの二人によるヴァイオリンとロシア風ダンス(下)

ンジャーの神門知令さんが代読しました。

メッセンジャー企画では、メッセンジャーの二人が七月にボルゴグラードへ行った際の写真を使って、ボルゴグラードの町並み、観光、グルメ、著名人などを紹介しました。続けてクイズ、簡単なロシア語講座を行い、最後にエカテリナさんのヴァイオリンと神門さんのロシア風ダンスを披露すると、会場は大きな拍手につつまれました。

続いて、ロシア音楽コンサートを行いました。広島合唱団の合唱により、さまざまなロシアの楽曲を披露しました。また、ロシアグッズの当たるお楽しみ抽選会をはさんで、再度広島合唱団が登場し、会場の参加者と合唱して大いに盛り上がりました。

当日は、約二百四十人の参加者が姉妹都市交流の和を深めました。(国際交流・協力課)

JICAサロン 余熱の会〜シニア海外ボランティア経験者が語る派遣国の魅力〜ミクロネシア

九月四日、国際交流フロンジを会場に、(独)国際協力機構(JICA)中国との共催で、第三回JICAサロン「余熱の会 ミクロネシア」を開催しました。

今回の講師である中尾文広さんは、シニア海外ボランティアとして二〇一三年から二年間、ミクロネシア連邦のヤップ島に滞在し、現地の短期大学で溶接工学の指導にあたられました。滞在中のエピソードをはじめ、中尾さんにはミクロネシアの魅力について、たっぷり語っていただきました。

ミクロネシアは、太平洋西部、赤道の北半球側に、広く東西に散らばるよう位置する、ヤップ、チューク、ポンペイ、コスラエの四州(四島)と六百七の小さな島からなる連邦国家です。主な産業は漁業と農業で、観光にも力を入れています。

その中で、中尾さんが滞在されたヤップ島は、最も伝統が色濃く残る島として有名で、人々は今も伝統を守りながら暮らしています。古くから交通手段にカヌーを使用

し、航海術が発達しています。また現在でも、石のお金(石貨)が土地の売買や結婚式などの儀式の際に使用されています。ヤップ島の州旗は、このカヌーと石貨をモチーフにしています。

一方で、現代の消費文化はヤップの伝統文化にも少しづつ影響を及ぼしています。現代社会と調和しつつ、いかに島の伝統を守り、継承していくかという新たな課題にも直面しています。

中尾さんは写真を交えながら、ミクロネシアの魅力を幅広い切り口から伝えてくださいました。参加者の方々の興味も尽きることなく、中尾さんのお話を耳を傾けていました。そして、南国の空気がふわりと漂う、和やかな雰囲気にも包まれたまま、会は終了しました。(国際交流・協力課)



ミクロネシアの魅力語る講師の中尾さん(左)

海外からの来訪者が 発信するメッセージ

「広島平和記念資料館芳名録より
抜粋。各大使館から了解の取れ
ている和訳を掲載しています」

バラク・オバマ／アメリカ合衆国
大統領

私たちは戦争の苦しみを経験しま
した。
共に、平和を広め核兵器のない世
界を追求する勇気を持ちましょう。

(二〇一六年五月二十七日)



オバマ大統領がメッセージに添えた折り鶴

G7広島外相会合出席者

ジョン・F・ケリー／アメリカ合衆
国 國務長官

世界中の全ての人が、平和記念資

料館が持つ力を目で見えて感じるべ
きです。資料館は、核兵器の脅威
に終止符を打つことだけでなく、
戦争そのものの回避に全力を傾け
ることが我々の責務であると、明
白、厳格かつ説得力のある形で思
い出させてくれます。戦争は最終
手段であるべきであり、第一の選
択肢にはなりません。この資
料館では誰もが、世界を変え、平
和を見つけ、世界中の人々が切望
している未来を築くために一層の
努力をする気持ちになります。

(二〇一六年四月十一日)

パオロ・ジェンティローニ／イタリ
ア共和国 外務・国際協力大臣

原爆の悲惨な記憶は未来への教訓
です。

世界各国の国民と政府は、このよ
うな悲劇が二度と起こらないよう
に努力しなければなりません。
核軍縮と核不拡散は我々の共通の
目標です。イタリヤは犠牲者のこ
とを決して忘れず、未来のための
努力を惜しみません。

(二〇一六年四月十一日)

フリッパ・ハモンド／英国(グレイ
ト・ブリテン及び北部アイルラン
ド連合王国) 英外務・英連邦大
臣

ここは重要な場所です。この資料
館を訪問して心を打たれました。

ここに展示されているものは、争
いを平和的に解決する義務を、そ
して戦時下の一般市民にもたらさ
れた想像を絶する結果を我々全員
に訴えかけています。その結果は
戦争を始める人々には制御できな
いものです。
紛争を協議と妥協により解決でき
る、核兵器のない世界のために必
要な条件の構築に向けて共に一層
の努力をしていきましょう。

(二〇一六年四月十一日)

フェデリカ・モゲリーニ／欧州連
合 欧州連合外務・安全保障政策
上級代表兼欧州委員会副委員長

過去の苦しみの記憶が、未来の正
しい選択に繋がりますように。そ

平和記念資料館からのお知らせ 東館リニューアルオープ ンの予定を変更しました

平和記念資料館は、展示内容
の更新のため、現在、東館の常
設展示室を閉室し、本館のみを
ご覧いただいています。

新たに東館建物の耐震工事が
必要となったため、平成二十八
年十月に予定していた東館のリ
ニューアルオープンを平成
二十九年二月に変更しました。

して、史上最も恐ろしい爆発の瓦
礫の中から草木が芽を出したよう
に、過去の荒廃から平和な世界が
生まれることを祈ります。核軍縮
核不拡散、そして核の安全性のた
めの努力が、いつの日か核兵器の
ない世界をもたらすでしょう。

(二〇一六年四月十一日)

【書籍の紹介】

なぜ核はなくならな いのかII「核なき世 界」への視座と展望

広島市立大学広島平和研究所 監修

核兵器の廃絶は、なぜ進まない
のか。この問いに、広島平和研究

東館リニューアルオープンに合
わせて、渡り廊下及び本館の改
修工事を行うため、本館を閉館
します。

工事期間中は、ご不便をおか
けしますが、ご理解・ご協力の
程よろしくお願いいたします。

本館の改修工事後、平成
三十年七月に全館リニューアル
オープンする予定です。

【お問い合わせ】

平和記念資料館 学芸課
☎(082)241-4004



所の核・軍縮研究会で十二人の論
者が挑み、「核なき世界」実現への
展望を多角的に示そうと試みた著
作です。広島や長崎、東京の研究
者やジャーナリストの意欲ある論
考に加え、米国人歴史研究者も米
国における衝撃的な「ヒロシマ」
のイメージについての考察を寄せ
ています。

著者

広島市立大学広島平和研究所監
修、吉川元・水本和美編

執筆者十二名

発行年月日

二〇一六年八月六日

ページ数

三百三十五頁

定価

二千円(税別)

【お問い合わせ】

株式会社 法律文化社
☎603-80533

京都市北区上賀茂岩ヶ垣内町七
☎(075)791-7131